



「浦和のさかえに 歴史をほこる」開校152年目の挑戦

大いちょう

令和 4年 7月 1日
さいたま市立高砂小学校

高砂小学校だより 令和4年度 No. 4 048 (829) 2737

目隠し遊びと三つの気づき

校長 永山 誉

平年より22日早い梅雨明けと、猛暑の中での7月のスタートとなりました。本日から7月。令和4年度1学期もいよいよ1か月を切りました。令和4年度に入ってからのお子様の成長ぶりはいかがでしょう。7月21日からは、36日間の長い夏休みに入ります。1学期の残りの1か月、子どもたちには、これまでの取組を振り返りながら、成長した点とこれからの課題を整理して、夏休みを迎えられるようにしていきたいと思ひます。また、暑い日が続きますので、熱中症対策を十分に講じながら、教育活動を展開してまいります。引き続き、保護者の皆様には、学校教育への御理解と御協力をよろしくお願ひいたします。

さて、皆様は「ブラインドサッカー」を御存じでしょうか。本校では、5年前から、埼玉大学教育学部准教授の菊原 伸郎（きくはら のぶお）先生をお招きし、5年生の授業で「ブラインドサッカー」を実施しています。菊原先生が実施する、視覚障がい者サッカーの一つである「ブラインドサッカー」を取り入れた授業では、「ブラインドサッカー」だけでなく、「目隠し遊び」も実施しています。菊原先生は、その著書「目隠し遊びで始める インクルーシブ教育」（大修館書店）の中で、感覚器制限付き運動「目隠し遊び」の教育的価値として、子どもたちは「目隠し遊び」を通して「身体の使い方への気づき」「言葉の使い方への気づき」「障がい者への気づき」といった三つの「気づき」を得ることができ、この「気づき」が「排除しない」「多様な存在を尊重する」といったインクルーシブ教育の基本理念につながっていると述べています。

「目隠し遊び」は、アイマスクなどを使って、視覚情報を遮断した仲間と二人一組やグループを作って行う運動で、視覚情報を遮断されていない人のサポートを受けて、視覚情報が遮断されている人が安全かつ確実に目的を達成するという遊びです。「目隠しウォーキング」「宝探し」「じゃんけん列車」「ボール渡し」「コーン当てゲーム」など多彩です。この遊びを通して、「言葉の使い方」の良し悪しにも気づくことができます。「そこそこ」「もうちょっと」と言われても、そこってどこなのか、もうちょっととはどの程度なのか、視覚情報を遮断された者にとってはわからないものです。このような体験を通し、「コミュニケーションの取り方」つまり「相手の立場になって声をかけてあげること」の大切さを体感することができます。この授業では、体育の授業ですので、「体の使い方への気づき」を得ることが大きな目的ですが、「言葉の使い方への気づき」を得ることは、人と人との接し方や日常生活の送り方にも関係するととても大きな価値あるものと考えます。6月は、いじめ撲滅強化月間ではありましたが、「相手の立場になって声をかけること」の精神は、いじめ防止の観点からも重要なことであり、この授業を経験した高学年から、年間を通して全校に広めていければと考えています。

子曰わく「辞は達するのみ」

『論語』の中に、このような章句があります。これは、「言葉というものは、相手にその意味が十分に伝わるようにすることが大切なのだ」と孔子が言ったものです。「私は聞いていない。」「私はちゃんと伝えた。」人との会話の中で、このような場面が日常でないでしょうか。当然聞く側の姿勢も大切ですが、相手にその真意が伝わってこそ、相手に言ったことになるのではないのでしょうか。相手にちゃんと伝わったのか、相手の立場になって伝えたのか、「ブラインドサッカー」の取組を通して、このようなことも日々考えながら、私自身も自らの行動を振り返ってみたいと考えています。